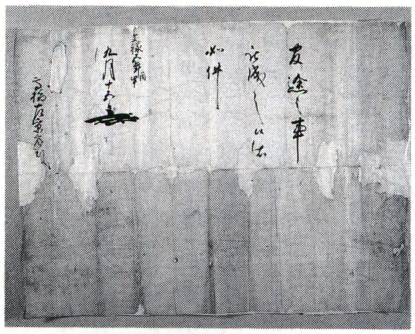
寄託文書紹介14

高橋悦郎家文書

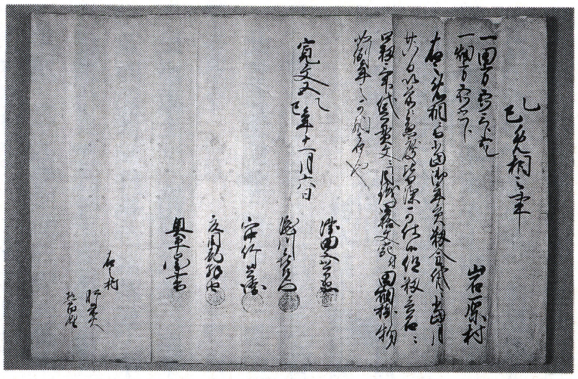
今回紹介する高橋悦郎家文書のある宇都宮市岩原町は、市の北西部にあり、大谷石に似た凝灰岩である岩原石を切り出しています。

高橋家は宇都宮氏の家臣でしたが、主家の改易後、高橋左京亮が村の長役になり帰農しました。そして代々岩原村で庄屋（名主）を勤めていくことになります。

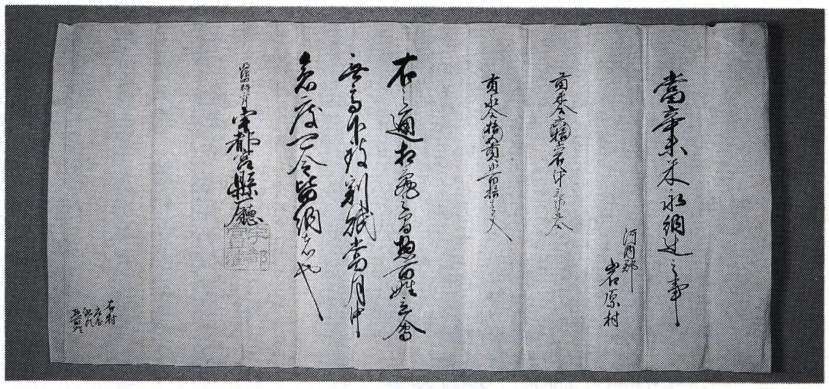
そのため同家には、江戸時代の村の様子や生活を知りうる基本的な史料が数多く残されてきました。特に年貢割付状は、寛文五年（一六六五）から明治四年（一八七一）までの約二〇〇年間、殆ど欠けることなく見事に揃っています。それも虫損等殆どなく、良好な状態で保存されてきました。宛所は、寛文五年には肝煎と記されていましたが、寛文八年（一六六八）からは庄屋となり、様式もまた変わっています。この年に宇都宮藩主の国替があり、呼称の違いや様式の変化はここにあるのかもしれません。最後の明治四年の割付状は、それ以前のものに比べて文面が大変簡潔になり、また発給者宇都宮県庁の下に宇都宮藩印が押されてあり、面白い史料だと思います。



高橋家最古の古文書
文禄５年(1596)官途状



寛文５年　年貢割付状



明治４年　年貢割付状

宗門改帳も天和二年（一六八二）から幕末期まで数十冊残されていますが、幕府が諸藩に作成を命じたのは寛文年代ですので、天和二年のものは大変古く貴重なものと思われます。

その外、割付状以外の年貢関係の文書、万治元年からの検地帳、宗門送り・受取状等の公的文書から、多様な私的文書に至るまで、大量の文書があります。

明治時代になると、当主新蔵は村の地租改正取調方・戸長補・副戸長・戸長・区長・小学校事務掛・消防組合小頭ほか多くの公職を担い、それに係わる文書が大量に作成されていきます。

高橋家文書の大きな特色の一つは、明治期から昭和三〇年代に至るまでの近・現代史料も大量に保存されていることにあります。特に現代の資料を目のあたりにした時、今日の資料を保存し後世に残していくことの大切さを、高橋家文書は教えてくれるようです。

なお、『栃木県史料所在目録』第八・九集には、目録番号一～三〇三七、イ一～イ一七二三までしか掲載されていませんが、ほかにロ番号で近・現代を中心に三三三〇点に及ぶ未掲載の史料もあり、文書館の閲覧室で手書きの目録を見ることができます。（石川　誠）

◇　◇　◇　◇　◇

寄託点数八、五八二点

戸長役場看板